

# 文化庁月報

No.382  
2000年7月号

## CONTENTS

### 特集／国際文化交流の推進 ——中国および韓国との交流

〔論文〕

4 中日文化交流の推進を

劉 徳有

6 未来志向の日韓文化交流を求めて

饒庭孝典

8 日中文化交流

文化財保護と日中文化交流

岡田康博

9 日本語教育の視点から

徐 一平

10 日韓文化交流

オペラ活動における芸術文化交流

池田 温

11 文化財保護と文化交流

竹田 旦

12 ふれあいの日本語教育をめざして

李 徳奉

〔解説〕

文化庁の日中、日韓との文化交流

協力に関する施策

総務課文化政策室

〔事例紹介〕

中国芸術家招聘研修

太刀川瑠璃子

17 日韓国際共同研究

青木繁夫・姜 大一

## ACA NEWS

- 第24回全国高等学校総合文化祭静岡大会、開幕せまる ..... 32
- 平成12年度舞台芸術ふれあい教室公演日程決まる ..... 33
- 文化財の新指定(美術工芸品関係-1) ..... 35
- 重要文化財(建造物)通潤橋  
——文化財の保存と活用に向けて ..... 40

## イベント案内

- 京都国立博物館「坂本龍馬と幕末の争乱」/ 42
- 国立国際美術館「ミロスワフ・パウカ」「東島毅」/ 43
- 東京国立近代美術館工芸館「かたちのちから」/ 44

新国立劇場 スポットライト / 45  
8月の国立劇場 / 46  
芸術文化振興基金ニュース / 47  
表紙解説 / 編集後記 / 48

## 連載

- Cross Road  
花柳千代さん(日本舞踊家) / 19
- これからのアートマネジメント⑥  
消費から創造へ——ワークショップの深化① / 22  
熊倉純子
- らしんばん  
セゾン現代美術館 / 24
- まちづくり最前線⑥  
上中町熊川宿伝統的建造物群保存地区 / 25
- 地域発 文化で国際交流④  
島根県出雲市神戸川太鼓 / 28
- こぼの万華鏡⑥  
人間に使う? ものに使う? / 30  
水谷 修
- MEDIA ARTS GALLERY④  
『タイムホーム』 / 31

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、ご質問、文化庁月報の感想などを、  
ホームページのご意見欄や文化庁のウェブマスター宛へお寄せください。  
〔ホームページアドレス〕 <http://www.bunka.go.jp/>  
〔ウェブマスターメールアドレス〕 [webmaster@bunka.go.jp](mailto:webmaster@bunka.go.jp)

国際文化  
交流の推進

中国および韓国との交流

**中国** 国と日本の文化交流は、現在全般的に  
いって良好で健全な状態にあり、中国  
の対外文化交流の中で一位を占めている。

一衣帯水の両国が歴史上二〇〇〇年の長きにわたる交流を続けてきたこともさることながら、両国の人々の強い願望をバックに国交正常化後における両国政府の重視と推進に負うところが大きいことは言うまでもない。

中日両国は、社会体制も文化的背景も違い、人々の考え方、心理状態、価値観にも差があることは周知のとおりである。だからこそ、今まで以上に心の通った文化交流や学術交流を進展させ、相互理解を深めて本心に自他を知るようにしなければならぬと考える。そのためには、相手方の歴史、政治、経済、

国際関係や国の進路を理解することも重要であるが、それにも増して、相手国の広義の文化、民衆の思考方式、そこに至る思考パターン、それらを生み出した文化の根源を研究する必要があるのではなからうか。文化交流こそ魂の交流であり、何よりも深い次元にかかわる交流である。

具体的には、お互いに自民族の優れた文化を紹介し、そのエキスを吸収し合うことが極めて重要であろう。これまでに、京劇や地方劇と歌舞伎、狂言、能などの相互訪問、話劇と新劇、シンフォニーオーケストラの相互訪問公演、書道、絵画、文物を含む展覧会などが効果的に行われてきたが、これからは同時に、詩歌（俳句、短歌を含めて）や質の高い小説、演劇、映画、テレビ番組、音楽、美術作品などの交流をもっと盛んに行われることが望ましい。文学芸術作品を通じて、相手方の社会意識や民族感情、人々の生活などがわかり、相互理解と友好増進に役立つことは言うまでもない。

各種演芸を含む中日間の文化交流を今後行うにあたっては、若干の工夫を凝らす必要があるように思う。



中国文化部元副部長  
交流協会常務副会長  
劉 徳有

中華人民共和  
国対外文化

## 論文 ◆ 1

## 中日文化交流の推進を

「比較」研究と鑑賞に供する交流をもっともつと試みてよいのではなからうか。

ここ数年、京劇、昆劇、話劇、オペラ、ミュージカル、舞踊（日本舞踊とバレエを含む）など様々な分野で、共同公演や翻案もしくは翻訳公演、スタッフの人材養成などの共同事業を通じて、すでに多くの経験が蓄積されている。

最近の例では、一九九七年北京と東京で公演が行われた花柳千代先生と花柳寿楽先生による舞踊劇「大敦煌」があり、これは日本舞踊と京劇による合作公演として注目を集め、大きな成功を収めた。数年前、中国京劇院と市川猿之助の一座が共同して作品づくりに取り組み、同じ舞台の公演にこぎつけたのが、大型神話劇「竜王」であり、両国を代表する二つの古典演劇が相寄り添って、作品づくりから始めて一つの舞台にまとめあげた試みは、まさに両国の演劇交流が上辺だけでなく内容

を深く掘り下げる絶好の例証となったと私は見ている。

日本の歴史劇を京劇やその他の伝統演劇の舞台に移して成功した例もあるが、早くには一九八八年、武漢漢劇院の青年実験団が近松門左衛門の「曾根崎心中」を演劇化して成功を収め、一九九二年の初め、真山青果の「坂本竜馬」が京劇化された。これは中国京劇史上はじめての試みであり、日本の歴史物語と京劇の芸術形式が見事に結合したというにとどまらず、京劇という総合的芸術の特色をよく表したものである。都民劇場創立五〇周年の記念行事として、上海昆劇院が木下順二氏の民話劇「夕鶴」の昆劇化を行ったが、これも実り多い試みとして、大変喜ばしい。

また、ミュージカルの面でも新しい合作の方式が生まれている。劇団四季はここ数年、中央戯劇院と中国児童芸術劇院に協力してミュージカル俳優と振り付け師の養成を手がけてきたが、こうして生み出された俳優と振り付け師は今、中国の舞台で活躍しており、最近北京で長期公演に成功した中国人による「美女と野獣」はその集大成であると言える。

近年、中国の民族音楽や邦楽、シンフォニーオーケストラの相互訪問公演など、音楽交流の面でも活況を呈しているが、昨年一〇月に実現した宝塚歌劇団の中国公演に特に触れ

まず、京劇の日本公演であるが、これまでは日本の観客に筋がわかってもらえないのではないかと心配するあまり、立ち回りや舞踊の多い演目に偏るきらいがあった。これでは京劇とは立ち回りと舞踊、果ては雑技のテクニク中心の演目ばかりといった誤った認識を日本の観客に与えかねない。しかし、日本人の中国に対する理解力、また中国の芸術に対する鑑賞力からすれば、これからは「唱」の聴かせどころをはじめ、様々な技法や内容を盛った演目編成を考えてもよいのではなからうか。歌舞伎、狂言、能などもたびたび中国で公演されてきたが、中国の観客によりよく理解してもらうため、公演の前にちよつとした実演を交えながら、キマリや特徴などを説明すると大変効果的だと思う。

また、特定のテーマを決めて比較研究を行うための演劇交流を提唱したい。八〇年代の中頃、東京と大阪で京劇と歌舞伎における立ち回りの比較が行われたが、日本の観客はこの二つの演劇形式がそれぞれ持っている立ち回りの特色をよく理解し、深い興味と関心を示したと聞いている。今後の課題として、京劇に限らず、様々なテーマを数多く設定して

ておきたい。

また、中国が新世紀に向けて行う西部大開発によって、歴史的文化遺産の発掘や考古学の発展に得がたいチャンスが提供されるにちがいない。文化遺産の保護などの面で相互協力ができればと思う。

現在、中日友好事業は前人の手から未来へと引き継がれる重要な時期にある。演劇交流も世代交代のキーポイントにさしかかっており、後継者養成に意を用い、この重要な仕事にもっと多くの力をさかなければならない。また、そうした観点から、青少年の演劇交流に力点を置き、新しい道を開くことが急務となっている。日本のいくつかの団体が中国各地の京劇院を招き、京劇を見たことのない日本の小中学生を対象に公演を続けており、また、人形劇などを通じて、子どもたちの間に中国への関心が高まっているが、こうした活動は今後も継続されることが望まれる。

文化交流にあたっては、相互に相手方の国情を尊重し、「異を残して同を求め、平等互恵、相互尊重」の原則と精神を貫くことが必要であろう。ここでも、つまり共通点とは、ほかでもなく、中日友好と相互理解の増進、相互学習と協力合作の強化、および平和擁護をめざす共同发展であらうかと思うが、ご賛同いただければ幸いである。

（原文は日本語）

論文 ◆ 2

# 未来志向の日韓 ——いろいろな「文

# 文化交流を求めて 「化」を通じての交流



杏林大学客員教授  
饗庭孝典

今回の総選挙を前に、「韓国に学ぼう」という市民運動の動きが一時マスコミを賑わした。直前に行われた韓国の国会議員選挙で「金権・腐敗の政治家は落選させよう」という市民運動が大きな成果を収めたので、日本でもやろうというものであった。

日本と韓国の政治文化はかなり違う。古代における濃密な政治的交流が言われながら、中世での両者の違いは歴然とし、近代化に対する対応では対照的な様相を示した。第二次大戦後の政治のあり方、つまり政治文化は一層はつきりとした違いを見せつけてきた。

外から与えられた民主主義を享受したかたちで日本に対し、韓国では独立後およそ四〇年にわたる強権・独裁政権に対する民衆運動の成果として民主化を勝ち取ったのだから両

国の政治文化が異なるのは当然であるが、ともかく今の韓国人の「政治好き」は日本人の比ではない。落選運動にしても「今の政治に愛想を尽かした」人たちが政治にそっぽを向くのでなく、政治を自分たち流に播きぶつたのである。選挙の本旨にもとる後ろ向き運動だと批判されながらも、「落選リスト」に載せられた候補の七割が実際に落選したという「実績」によって、この運動が韓国の政治文化の一部として認知されたことは間違いない。

日本での落選運動は今回はさして盛り上がることなく終わったが、日韓文化交流の一つとして興味ある出来事だった。キムチの作り方教室や女性エステの盛況、韓国映画の人気など日本人の韓国文化に対する関心はこのところ高まっただけだが、韓国での日本への関心に比べるとまだまだ低いだけに、「韓国に学ぼう」という声があがったこと自体が注目値することであった。

日韓双方が相手に対して持つ関心の度合いの違いは、マスコミでの報道をはじめマンガ、アニメ、歌謡曲から小説の翻訳まで、日本から韓国に流れる情報量に比べて韓国から日本に流れる情報量の少なさに端的に示されている。相手のことを学ぼうとしている人の数はもつと雄弁にその落差を物語る。去年の数字だが、韓国で日本語や日本学の講座を置いて

いる大学は全体の四六％、日本語を第二外国語として教えている高校が五二％あるのに対し、日本では韓国・朝鮮語あるいは韓国・朝鮮に関する講座を持つている大学はおよそ六％、高校で韓国・朝鮮語を教えているのは三％に過ぎない。

ソウルの日本語塾にはポケモン・ゲームに強くなりたいたい中学生が勉強しにくるという。動機は何であれ、言葉を知りたいことは国際的な相互理解を深める基になるから、日韓関係の今後のために喜ばしいことで、できればこの子たちにゲームだけでなく日本の子どもたちと人間的な接触をする機会を与えてやりたいものである。国と国との信頼関係は、結局のところ人間同士の相互理解、仲間意識から生まれるものだからである。

韓国のマスコミは対日摩擦がおきると日本批判をかなりどぎつい表現で書くことが多い。それは韓国メディアでの発言が日本に伝えられることが少ないので（日本でのニーズが少ないから当然である）「国内向けに思い切った」書くからだと言われるが、日本に知己の多いあるジャーナリストは「私の場合、どうしても日本の友人の顔が浮かぶ。彼が読んだらどう考えるかを思うと、感情のままには書けなくなり、筆が自ずと冷静になる」と言っている。互いに仲間と思える友人ができれば

のを日本に伝えた。近代以降は逆に、日本が拝むべき神様から姓名まで「日本文化」を一方的に押しつけた、というわけである。この図式からは恩を仇で返す卑劣な日本人という姿しか浮かんでこないし、事実、多くの韓国人の日本イメージはそれである。

しかし時とともに韓国の歴史家の中にも、自国の近代史を「日本の侵略・搾取とそれに対する韓国人の抵抗・民族独立運動」だけでなく、韓国人の中にも様々な対応があったことや日本統治下での工業化など社会の急速な変化を事実として認めるべきだという「近代化」論が聞かれるようになった。日韓が共通の歴史認識を持つことは難しいにしても、少なくとも歴史的史料を共有し、学問的に共同研究ができるようになる日もそう遠くないように思える。

する関心度は何とも低く見える。今度の南北首脳会談が朝鮮半島の統一にすぐ結びつくわけではないが、これまで韓国人を呪縛してきた「分断」意識が揺らいでいることは間違いない。独立以来の半世紀、韓国人の生き方すべてを規定してきたこのいわば「分断文化」は、戦後の日本のあり方にも大きな影響を与えてきた。それが揺らぎ出したというだけでも日本にとって大問題のはずである。

日韓文化交流の幅を広げるため、韓国政府はいま「日本大衆文化の段階的開放」に努めている。現実にある文化状況の追認に過ぎないとの見方もあるが、韓国の対日政策を「売国的」と非難してきた北朝鮮の存在を考えれば、この努力を過少評価すべきではない。それは単なる対日関係を越えた、朝鮮半島統一や東アジア全体の将来を見据えた政策の大事な一部のように感じられる。

そういう視野の中では、日本人の韓国に対

南北合わせて七、〇〇〇万を数える隣の民族が日本に好意を持つか、反感を抱き続けるかは日本の将来に大きく響く。これからは朝鮮半島全体を視界に入れた「日韓」の相互理解を深める文化交流を考えたいものである。芸術交流やワールドカップ共催と共に、政治文化で「韓国に学ぼう」という声があがったのはその意味でも結構なことである。

バブル崩壊後の経済構造改革への取り組みなどでは韓国のほうが日本の先を行っているというのが国際的通説のようである。かつては企業経営や工業技術管理での日本文化を取り入れて経済発展した韓国が、今は日本より先進的な部分を作り上げているのなら、それを学ぶべきである。互いに学びあい、競いあい、分かちあう——それが日韓文化交流の望ましい姿ではなからうか。

(二〇〇〇年六月三日)

## 日中文化交流◆1

# 文化財保護と 日中文化交流

青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室  
文化財保護主幹

岡田康博

三内丸山遺跡をはじめとして、従来の縄文観を変える発見が続いている。平成四年から開始した三内丸山遺跡の発掘調査は、縄文時代前々中期にかけて繁栄した円筒土器文化の拠点集落跡の実態を明らかにした。平成六年には直径1mを超える木柱を使った

年度に基本構想、平成九年度に基本計画を取りまとめ、現在は基本設計、実施設計の検討を進めている。

基本構想の中では、世界的視野からの縄文文化の見直しを掲げた。それに基づき、平成八年度から三内丸山遺跡対策室では国内外の縄文関連遺跡の調査を開始した。これは将来に向けての姉妹友好遺跡、博物館協定の締結、共同研究の推進を視野に入れたものである。

平成八年度は中華人民共和国東北部、平成九年度はロシア沿海州とサハリン州、平成一〇年度は韓国、平成一一年度サハリン州と現地踏査、関連資料や情報の収集、関係機関への訪問など具体的な事業を進めてきた。

また、毎年地元新聞社と共催で縄文文化に関するシンポジウムを開催し、東アジアの視点からの縄文文化の位置づけをテーマとした際には、中華人民共和国社会科学院考古研究所より研究者を招いて、参加いただいた。その際にも実際に発掘調査現場、遺跡の整備状況や活用事業、情報公開と発信の方法などをつぶさに見ていただき、学術研究だけではなく日本で行われている文化財保護行政の状況をよく知り、理解していただくことを心がけた。個人レベルでも情報交換を定期的に続け、相互の信頼関係を構築してきた。

そのような中で、平成一〇年度に考古研究所から発掘調査を中心にした共同研究の提案



がなされた。それは一つの遺跡に対して自然科学的分析はもちろん建築学や民族学からのアプローチなど学際的、総合的な発掘調査の基本的なモデルを構築したいとのことであった。さらに学術研究のみならず、発掘調査後の遺跡の保存や管理、整備、公開、普及教育情報発信など多岐にわたった。これらは今後中国国内において、急務の課題として取り組まなければならないものと思われた。埋蔵文化財である遺跡を国民共有の文化遺産としてどう保護し、活かしていくのかという、現在私たちが直面している課題そのものでもある。

## 世

界のグローバル化が進むにつれて、人々が外国人と交流する機会がますます増加する傾向にある。国家間の交渉をはじめ、ビジネス、留学、旅行など様々な場面で、地理的、歴史的、民族的背景の異なる人々同士が接するとき、言葉が不自由なため、思わぬ誤解やすれ違いなどの文化摩擦が起こるケースは決して少なくはない。こうい

## 日中文化交流◆2

# 日本語教育の 視点から

北京外国語大学教授

徐一平

った摩擦を少しでも避けるためには、おそろくそれぞれの国において、相手国の言語に関する教育を深めていくのが、非常に大切なことだと思われる。

中国における日本語教育は、中日国交回復と中国の改革開放政策の実施とともに、七〇年代末から八〇年代初期にかけての日本語ブームと日本留学熱にあおられて、急激に盛ん

になり、一時学習者数が一〇〇万人近くにも達したのをピークに、ここ数年、少しずつ安定してきたようだとされている。現在中国における日本語の学習人口は、二三万八、〇〇〇人で、五年ほど前とほぼ変わっていないようである。その中で、学習者は、大学で専攻として勉強しているものは約八、〇〇〇人で、非専攻として勉強しているものは約七万人で、中学校で勉強しているものは約一六万人だといふ。日本語教師の構成を見れば、八〇年代前半では、その大半が国内の大卒出身者、あるいは新中国以前の留日体験者、もしくはそれまでに何らかのかたちで日本語関係の仕事に携わっていた人が転向して日本語教師になったのに対して、今は修士課程や博士課程卒業、または最近日本留学から戻ってきた人が日増しに増えつつある。もちろん、全国的に見た場合、やはり北京や上海のような大都会に高学歴の人が集まり、地方の教育現場では、必ずしも十分に教育を受けた人が日本語教育に携わっているとは限らないというアンバランスな状況になっているのである。このようなことに鑑みて、一九八〇年からスタートした中日両国の共同事業である「中国大学日本語教師培训班」（俗称「大平学校」）も、後の「北京日本学研究中心」における「大学日本語教師研修コース」を経て、相前後して、およそ一、〇〇〇人ほどの大学教

師の再教育を行ったという実績を残しながら、このほど中日双方の相談により、それを大学教師の「在職修士課程の研修コース」に格上げするようにしたのは、まさにそのようなニーズに応えた適宜な決定であると言える。中国の日本語教育は、昔から実用能力重視で、学生に対しては、「聞く・話す・読む・書く・訳す」という五つの能力のレベルアップを要求している。そのような教育を受けた学生の実力は、時々日本人を驚かせるほど高いレベルに達し、それだけ、中国の日本語教育が成功しているとも考えられよう。しかし、どこの国の言葉でも、その国の文化から離れて、独立して存在しているものではない。言語の背後に存在している異文化に対する理解の如何は、その言語の最終的な教育結果にも影響しているのだと思われる。多くの事実が物語っているように、日本語の文章をすらすらと読めたからといって、あるいはぺらぺらと日本語を話せたからといって、すぐさま日本文化という異文化も十分理解しているということを意味しないだろう。そのような視点から見た中国の日本語教育は、また多くの未解決な問題を抱えていると言わざるを得ない。今後の日本語教育は、そういった異文化理解を視野に入れた、また広い意味での日本学との連携を考えた日本語教育にしていかなければならないと思う。

## 日韓文化交流◆1

# オペラ活動 における 芸術文化交流

武蔵野音楽大学教授

池田 温

近年、我が国には新国立劇場、韓国には芸術の殿堂オペラハウスというオペラ専用の劇場がオープンされ、共に優れた舞台が展開されている。そこで本稿では、その「オペラ」のジャンルについて両国の交流の現状をみてみることにした。

まず古くは、戦後昭和二十三年、韓国の有名な物語「春香伝」を題材に高木東六氏が作曲

したオペラ「春香」がある。東京有楽座で山谷涸子と永田絃次郎（昭和三五年北朝鮮へ帰国した歌手）の主役で初演された。

しかしその後両国の関係者は、共に自国のオペラ公演を実現することにそのエネルギーの大部分を費やし、他国との交流にまではとて考えを巡らす余裕はなかった。したがって本格的な意味での両国協力のオペラの舞台

が実現するのは、平成になってからである。

それは、文化庁海外芸術家招聘研修事業でその研修員に選ばれ、東京芸大大学院と二期会オペラスタジオで研修をした李恩順（ソプラノ）さんがきっかけではないだろうか。平成二年、幸い民間でも積極的に日韓のオペラ公演を支援してくださる方があり、東京室内歌劇場がこの李恩順さんを主役に、また演出家を韓国から呼んで「ササンナの秘密」（ヴォルフ・フェラーリ作曲）の公演を実現させた。これがおそらく本格的な協力公演の最初ではないかと思う。同団体は、翌平成三年、今度は中村栄（日本）台本、李演國（韓国）作曲によるオペラ「人は知らずーおたあジュリアの殉教」を制作、公演。さらに、この作品は、翌年李恩順さんを主役に再演して評価を高めていった。後に同団体はソウルに赴き韓国のオペラと合同公演を行うなど、その交流の実を挙げていった。このような活動に連動したものとされるが、その後平成九年には、二期会と韓国国立オペラ団とが共にトップの歌手たちを出し合って混成のキャストイングをした「リゴレット」（ヴェルディ作曲）公演をソウルと東京で行い、翌一〇年には韓国の名テナー、李炫氏が日本オペレッタ協会の「微笑みの国」（レハール作曲）のスー・ホン役を日本語で歌い、さらに本年三月には、藤原歌劇団公演「椿姫」（ヴェルディ作曲）とニュー

オペラプロダクション公演「カヴァレリア・ルステイカーナ」（マスカニニ作曲）、「道化師」（レオンカヴァッロ作曲）の公演には、いずれも主役に韓国の歌手を配し成功を収めている。さらに来年以降もいくつもの我が国のオペラ公演に韓国のオペラ歌手の出演が予定されていることも聞いている。

現在では、このように日韓のオペラにおける交流は、互いにスタッフ、キャストの一員として加わるオペラ創りにまで進んできた。韓国では、曹秀美（日本ではスミ・ヨーで知られている）のように世界の舞台で活躍する歌手をはじめ、若手では昨年静岡の国際オペラコンクールで入賞したバリトンの韓民元（ハンミン）などオペラ歌手の活躍がめざましい。さらに来春合併する新星日響と東フィルとの新オーケストラのアドバイザーには、世界的に活躍している韓国出身の指揮者鄭明勲氏が就任することになったという朗報ももたらされた。さつと同氏の指揮する日韓歌手によるオペラを観られる日もそう遠くはなからう。民族的にも、地理的にも、そして音楽を移入しオペラ活動をしている歴史も最も近い国韓国とは、今後一層の交流の進展が図られ、互いの国でさらなるすばらしいオペラの舞台が展開されるようになることを期待しているところである。

## 韓

国には、民俗村・民俗マウル（マウルは韓国語で村の意）という野外展示施設が各所にある。一番有名なのが、ソウル市から南方へ電車やバスで約二時間、京畿道龍仁市の山裾に広がる「韓国民俗村」である。これは失われていく民俗文化財を収集・展示

## 日韓文化交流◆2

# 文化財保護と 文化交流

茨城大学・創価大学名誉教授

竹田 旦

し、伝統文化の再現を図って、一九七四年に開設された施設である。三〇万坪余という広い敷地に復元された各地の民家二六〇余棟を中心に、両班（李朝時代の高級官僚）の邸宅や官衙（役所・寺院・工房などが配されている。これらの家々では人々が実際に働いてお

り、たとえば鍛冶屋では鍛冶師が、飴屋では飴作りが、機屋では織り子が忙しげに動き廻っている。広場では、農楽や綱渡りなどの芸能、旧式の婚礼風景なども毎日実演されている。日本にも同種の施設が各地に認められるが、いずれも内容・規模ともはるかに及ばない。いったいに日韓両国では、民俗文化財の保護に関して類似と差異が交錯している。その中で気づいた点を指摘してみれば、次のようである。

(1) 日本では、民俗文化財を有形文化財・無形文化財・記念物・伝統的建造物群などに並べて独立の種目に立てている。すなわち、①衣食住・生業・信仰・年中行事等に関する風俗習慣、②民俗芸能及びこれらに用いられる衣服・器具・家屋その他の物件で、日本国民の生活の推移の理解のために欠くことのできないものを民俗文化財と規定している。これらのうち、特に重要なものを国や自治体で重要有形民俗文化財・重要無形民俗文化財に指定し（二〇〇〇年四月現在、国指定は計三八八件）、それぞれ保護を図っている。

(2) 韓国では、民俗文化財という種目を立てず、無形文化財に包含し、①芸能（音楽・舞踊・演劇・ノリ（民俗芸能）・儀式・武芸）と②技術（工芸技術・飲食製造）に区分している。そして歴史上・学術上・芸術上価値が高

く、郷土色の顕著なものを重要無形文化財に指定するとしている（二〇〇〇年四月現在、国指定は計一〇三件）。

(3) 韓国では、重要無形文化財の保有団体と伝承者（保有者・補助者（保有者候補・助教・補助者））に対して、「伝承支援金」を交付している。もちろん芸能・技術にも適用される。二〇〇〇年四月現在、月額で補助団体には運営費四〇万ウォンと教育費二〇万ウォン、伝承者には保有者九〇万ウォン（「極貴重保有者」には二〇万ウォン追加、補助者には保有者候補に三五万ウォン、助教と補助者にそれぞれ三〇万ウォンとなっている）。

(4) 韓国では、国や自治体が重要無形文化財の保有団体に補助して、現地に「伝授会館」を建てさせ、ここを中心に文化財の伝授（教育・運営等）を図っている。

(5) 韓国では、重要無形文化財、特に芸能種目の海外公演を推進し、日本でもしばしば公演会を開催している。これに対して、日本側から韓国への民俗文化財の進出はまだ緒に付いたばかりである。

以上の指摘は、ほんの個人的な感想にすぎない。けれども、これらの諸点を参照して文化交流に当たれば、実りは多いものと思われる。



国際理解教育の時代

世界中が地域別経済圏で結ばれていくなか、世界経済の大きな役割を担っている東アジアだけにおいては、まだ、ブロック化の兆しさえ感じられない。今後の外国語教育とりわけ同一地域内の言語教育は、将来のこのような段階に備えての環境づくりの役割

日韓文化交流 ◆ 3

ふれあいの  
日本語教育を  
めざして

韓国・同徳女子大学教授  
韓国日本学会会長

李 徳 奉

を果たさなければならないと思う。同じく日本語教育においても、ビジネス上の商売道具としての学習目的だけでなく、日本の文化を理解させる交流のための日本語教育の展開が必要であらう。

韓国における日本語教育の新しい動き

韓国の中等日本語教育における第七次の新

学習指導要領には、教育内容の項目に文化学習の項目が新しく加わっている。日本語教育の目標にも、日本人の行動様式を理解し日本との国際交流に能動的に参加する態度を養う」というくだりがある。従来の情報収集や就職の道具としての日本語学習にとどまらず、日本との積極的な交流のための日本語学習をめざしているわけである。このような「ふれあいの日本語教育」方針は、いたるところに表れている。例えば、九七年から毎年行われている全国国公立中等学校の日本語教員採用試験にも、日本文化関連の問題が一五%前後出題され、文化の理解を要求している。また、今年の大学修学能力試験に新しく加わる第二外国語の日本語科の問題にも日本文化に関する問題が一〇%近く割り当てられている。さらに、来年から中学の日本語教育で用いられるはずの国定教科書にも、文化を取り入れた日本語学習ができるよう編成しているなど、文化理解を重んじた日本語教育の実行は、すでに本格化していると言える。

総合的日本語教育に向けて

今年の一月にソウルで開かれる韓国日本学会と日本の日本語教育学会の共催による国際シンポジウムの主題は、「総合的日本語教育のための語学・文学・文化・メディア活用のある方」となっている。すなわち、言葉だけ

の教育より、文学や文化までを入れ混ぜての総合的日本語教育をめざしてのテーマなのである。前述の国定中学日本語教科書は、文化を取り入れた日本語学習という考え方に基つき、日本文化の体験やゲーム、交流活動、インターネット体験などの活動を通じて日本語の学習ができるように学習内容が組まれている。このような文化を取り入れた日本語学習を進めていく上で妨げになるのは、文化に関する情報の乏しさや、著作権の壁である。したがって、このような教育を活性化するためには、文化情報提供のためのデータベース構築が必要である。また、交流による体験学習の機会を増やすために、インターネットによる交流網の構築をはじめ、画像会議やチャットの機会を増やすことなどが望まれる。

ただし、交流教育を成功させるためには片思いのような一方通行式教育になってはいけないと思う。というのは、国際関係における理解とは、相互理解を前提とするものでなければならぬからである。したがって、これからの外国語教育は、相互理解のための相互教育といった考え方に基づいて行っていくべきであらう。とりわけ、地域内の交流および教育においては、経済的市場拡散の論理より、地域内の共生の論理に基づいた教育および文化交流であってほしい。

解説

文化庁の日中、日韓との文化交流・協力に関する施策

総務課文化政策室

国際化の進展に伴い、国際的な文化交流がますます重要なものとなってきた

が、その中でも中国及び韓国は、地理的、歴史的、文化的に関係が深いことから、これらの国々との文化交流を推進することは、我が国の文化の今後の発展にとって極めて重要である。

近年の日中、日韓の首脳会談においても、文化交流の重要性が指摘されており、日中、日韓の間で様々なレベルの文化交流を推進することが合意されている。また、昨年の日中文化友好年記念事業の開催、二〇〇二年のワールドカップサッカー大会の同時開催など、交流の気運はかつてない盛り上がりを見せているところである。我が国としてもこれを中国及び韓国との文化交流を一層推進していくにあたっての契機ととらえているところであり、文化庁においては、日中、日韓文化交流の推進事業として以下のような事業を展開しているところである。

一、日中間の文化交流関連事業

(1) 日中高校生文化交流事業

(平成二一年度) (二、二〇〇万円)

全国高等学校総合文化祭で選ばれた優秀校を中国に派遣し、また中国から文化活動に関する優れた評価のある高等学校を全国高等学校総合文化祭に招へいして、文化活動の相互交流を図る。

平成二一年度は、岩手県立盛岡第二高等学校生二四人を中国音楽院附属中学校に、山形県の高橋生一五人を哈爾濱市師範学校に、新潟県立羽茂高等学校赤泊分校生四五人を哈爾濱第一中学校に派遣するとともに、哈爾濱市師範学校生二〇人を招へいし、交流を行った。

(2) 中国芸術家招へい研修

(平成二一年度) (二、三〇〇万円)

中国の若手芸術家を招へいし、我が国における研修や我が国の若手芸術家との交流の機会を提供する。

平成二一年度は、何燦波(絵画)、刘尔明(建築設計)、陳建国(バレエ)、楊琳(日本映画研究)、汪曉志(日本映画研究)の五名を招へいた。

(3) 東アジアにおける生産遺跡の調査研究

(平成二二年度) (二、四〇〇万円)

奈良県「飛鳥池遺跡」の発掘調査で注目を集めた七世紀代を中心とする製造関連の遺跡について、特にガラス製品と銅製品の生産を中心に、日中両国の技術と文化の交流を解明する目的で、中国河南省文物考古研究所と合同調査研究を行う。

(4) 海外展(アジア友好日本古美術展)

(平成八年度) (二、六〇〇万円)

我が国の優れた文化財をアジア諸国に紹介し、日本の歴史、文化に対する理解を深め、国際文化交流を推進するため、国宝・重要文化財を含む日本古美術展を開催する。

平成二二年度は、上海博物館において「日本文物精華展」を平成一三年一月二〇日から三月二〇日まで開催する。

(5) 博物館等海外交流古美術展

(平成五年度) (二、八〇〇万円)

我が国の国立博物館(東京・京都・奈良)と諸外国の博物館・美術館との間で、相互に各々が所有する日本古美術・東洋美術を中心とする交流展を開催する。

平成二一年度は、香港芸術館の所蔵品を東京国立博物館で展示・公開した。平成二二年度は、東京国立博物館の所蔵品を香港芸術館で展示・公開する。

(6) 敦煌文化財保存修復に関する研究協力



**財** 団法人スターダンサーズ・バレエ団が、平成一一年度海外芸術家招聘研修員受入事業による研修生を受け入れた経緯と概要を説明します。

## はじめに

平成一一年当時北京中央バレエ団に在団していた千葉県出身のバレリーナ石野寛子女士から、当バレエ団に日本で研修の機会があれば是非希望したいという団員がいるので、その希望を実現することの可能性を打診してきました。



’99スターダンサーズ・バレエ団  
11月公演  
ピーター・ライト版  
「ジゼル」より  
第1幕 バ・ド・シス  
須永リエ／陳建國  
©A.I Co.,Ltd.



(財)スターダンサーズ・バレエ団  
常務理事

太刀川瑠璃子

# 中国芸術家招聘研修 (財)スターダンサーズ・バレエ団

## 事例紹介 ◆ 1

日本古代都城の源流を明らかにするために、中国古代の四都城（漢魏洛陽城・河南省洛陽市、業北城・南城・河北省臨華県、隋唐長安城・陝西省西安市、漢長安城・陝西省西安市）について、中国社会科学院の協力を得て調査しようとするものである。調査に関しては、分布調査・地下探査・発掘調査等の考古学的な調査法を駆使し、遺跡の性格を正しく把握し、保存設備に対する基本構想を作成すること

（昭和六一年度）（二、五〇〇万円）  
中国敦煌莫高窟の保存修復のため、専門家の相互交流、日中共同研究等の協力事業を推進する。  
平成三年度より五ヶ年計画で第一期、平成八年度より三ヶ年計画で第二期を実施しており、平成一一年度より三ヶ年計画で第三期を実施している。第三期の研究計画としては、  
(1) 環境測定：窟内の温度と湿度等の測定を敦煌側が担当、(2) 修復に関する研究：①コンピュータによる損傷・修復記録システムを開発、五三窟壁画を対象に簡易図面を作る、②修復材料などの選定実験を東京で行う、③測色と顔料分析データを取り込んだコンピュータ上での変色部分の復元壁画図面の作成、(3) 日中修復用語集の改訂等を実施予定。  
(7) アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力  
（平成八年度）（五、〇〇〇万円）

とを目的としている。また、調査内容を充実するために、中国社会科学院からも担当研究者を招へいし、日本古代都城遺跡研究の現状の認識と、発掘調査技術などの交流・調整を図る。  
平成八年度には、当該各遺跡の現状を把握するための基礎調査を行い、中国社会科学院と今後の調査の進め方について綿密な検討をした。平成九年度からは、漢長安城桂宮の発掘調査を中国社会科学院と共同で開始し、平成一一年度も引き続き実施した。  
二、日韓間の文化交流関連事業  
(1) 日韓高校生文化交流事業  
（平成二年度）（二、四〇〇万円）  
全国高等学校総合文化祭で選ばれた優秀校を韓国に派遣し、また韓国から文化活動に関する優れた評価のある高等学校を全国高等学校総合文化祭に招へいして、文化活動の相互交流を図る。  
(2) 韓国芸術家招へい研修  
（平成二年度）（二、一〇〇万円）  
韓国の若手芸術家を招へいし、我が国における研修や我が国の若手芸術家との交流の機会を提供する。  
(3) 日韓文化交流展準備  
（平成二年度）（七〇〇万円）  
日韓共同により開催される「二〇〇二年サ

ッカーワールドカップ」の機会をとらえ、日韓文化交流をさらに拡大・発展させるため、象徴的な催しとして政府関係レベルの文化交流展を日韓双方で実施する。その準備のため、事前の企画・調査を行うとともに、日韓両国の研究者等の交流を図る。  
(4) 東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力  
（平成二年度）（再掲）  
奈良県「飛鳥池遺跡」の発掘調査で注目を集めた七世紀代を中心とする製造関連の遺跡について、特にガラス製品と銅製品の生産を中心に、日韓両国の技術と文化の交流を解明する目的で、韓国国立文化財研究所と共同研究を行う。  
(5) 文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力  
（平成七年度）（六、一〇〇万円）  
大韓民国国立文化財研究所とは、「文化財における環境汚染の影響と修理技術の開発研究」のテーマで国際共同研究を行っている。環境汚染による文化財への影響の基礎的研究を行っていた第一期研究が昨年度で終了し、本年三月、第二期共同研究合意書に調印した。第二期研究は、本年度から五ヶ年計画で実施され、第一期研究の成果に基づいて、大きな保存上の研究課題である石造物の保存修復研究に関して双方でフィールドを設定し、より具体的な保存研究を行う。

当バレエ団の中国との交流は古く、昭和六一年には北京中央バレエ団と北京市天橋劇場で合同公演を実施した経緯もあり、平成一〇年には日中平和友好条約締結二〇周年を期して、日中合作バレエ「鶴の橋」の上演公演の実現に協力する等の実績を積んできました。バレエ芸術の国際性からもスターダンサーズ・バレエ団の設置目的からも、この機会を一つの国際協力の実現の場として、東京バレエ協議会を通じて文化庁に受入申請を行ったところであります。

## 概要

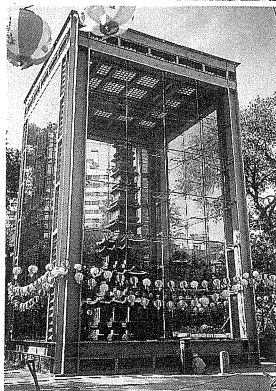
受入研修員の氏名は陳建國、一九七三年生まれの二五歳の青年で、北京中央バレエ団所属の舞踊手です。彼の略歴は一九八六年北京舞踊学院入学、一九九三年同学院卒業・中央バレエ団に入団しましたが、舞踊学院在学中にはカナダや香港での公演にも参加し、国内のコンクールにも出場し優れた成績を収め、入団後もアメリカ、インドネシアでの外国公演に参加し、公演における役柄においても重要な配役に選任されてきました。  
当バレエ団では当人がすでに相当の経験と識見を備えていることから、すでに培われた技量をさらに向上させ、より高い洗練された演技力の習熟に主眼をおいて研修を実施することとし、指導は当バレエ団バレエミストレ

人間の旺盛な社会活動によって排出される汚染物質が原因となって引き起こされる酸性雨、地球温暖化、オゾン層の破壊などの地球環境問題は、健康被害や森林の立ち枯れなど我々の生活に大きな影響を与えていることはよく知られているところである。「環境」をキーワードとして文化財の保護を見るならば、次のことが考えられる。

- (1) 金属文化財の鎌倉大仏（国宝阿弥陀如来坐像）や東大寺金銅八角燈籠（国宝）のように屋外にある文化財の腐食の進行、あるいは石造建造物の溶解など、環境汚染物質が文化財破壊の原因になり、文化財の保存に深刻な影響を与えている場合。
- (2) 虫害を受けた文化財を臭化メチルで殺虫

## はじめに

〈写真1〉圓學寺址十層石塔(国宝第2号)  
(上)と、完成した覆屋(下)



東京国立文化財研究所  
青木繁夫  
大韓民国国立文化財研究所  
姜 大一

# 日韓国際共同研究

## 文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究

### 事例紹介 ◆ 2

ス新井咲子、バレエマスター鈴木稔を中心にバレエ団の指導者が当たることとしました。研修の方法は当バレエ団の一年度三回の公演（すべて文化庁芸術創造特別支援事業）に陳建国を出演させることとし、公演前まで繰り返されるリハーサルに他の団員とともに加わり、研修目的のより高い洗練された演技力の習熟に当たりました。

陳の来日は平成十一年七月二十九日、帰国は平成十二年三月三〇日、その間三回のバレエ団自主公演と一回の地方依頼公演に出演し、本人も研修報告に記したように所期の成果を挙げました。（研修の詳細は右表参照）

### 陳建国がバレエ団に提出した報告書の抜粋

○テクニクだけではなく洗練された表現力やダンサーの修養の必要性を認識した  
（レッスンの指導者の言からの感想）

○団員のリハーサルに臨む姿勢、学び続ける姿に感動を覚えた  
（団員の真剣な日常の練習風景の感想、その精神の持ち方に学びたいと付言すること）

○音楽の中で踊りを完成させること、踊っているときは硬直せずリラックスすること  
（ジゼルは中国でも踊ったが版本が違い演出内容も複雑、指導者の要求も厳格）

※男女6人の踊り

日程	研修施設	主たる指導者	研 修 方 法
7月29日 8月16日	バレエ団スタジオ 及び青山劇場 群馬県藤岡市 かぶら文化ホール	鈴木 稔 新井 咲子	「コッペリア」のリハーサル参加 本番出演「第二幕人形スコットランド」
10月2日	依頼公演	小山 恵美	「くるみ割り人形」本番参加 「第二幕 ロシアの踊り・ソリスト」
8月20日 11月21日	バレエ団スタジオ 及び東京文化会館	新井 咲子 アベ テエ	「ジゼル」のリハーサル参加 本番出演「第一幕 村の若者たち・パ・ド・シス」
11月22日 3月19日	バレエ団スタジオ 及びゆうほうと簡 易保険ホール	新井 咲子 小山 恵美	リハーサル・本番出演「二〇世紀のマスターワークス」 「ウェスタンシンフォニー第四楽章ロンド」

### スターダンサーズ・バレエ団から

○この役がこのバレエで如何程の重要性があるかを認識し、レッスンリハーサルに努力すること

（公演直前まで指導者が繰り返し説明した言葉から）

○このたびの日本での研修は正解だったと確信、日本のこのような文化交流を称賛する。芸術には国境は無く、世界中の芸術家が交流を持ち、互いを理解し合うことが肝要。

研修生陳建国は日本語も英語もできず日常生活にも相当難儀しているように見受けました。バレエ団の中で活動には中国人団員もいたことと、中国語ができる若干の団員がいて、特段の支障もなく進められました。日常の会話の問題がやはりあります。

今回の在日中の宿舎はウィークリーマンションを利用させましたが、経費的にも安価で設備的にもよく整備され長期滞在には好適な宿舎が確保できました。

八ヶ月の滞在中、年末年始の長期休暇中に一度私費で北京に帰宅したいと申し出がありました。制度上のこともあり許可しませんでした。

この制度の優れたところは期間が長期であることと、その間の滞在費の件です。特に芸術の分野においてはその有為性は際立っています。



## 韓国国立文化財研究所との国際共同研究

第一期研究では、まず①酸性雨など環境汚染による被害の実態について両国間で共通認識を持つことから始め、②気象観測、環境汚染物質の測定項目および測定方法の検討、③測定データの取り扱いの検討、④酸性雨などの影響を調べるために使用する暴露試験試料の標準化などの研究が行われた。

文化財被害の実態について、我が国の石造文化財は砂岩や凝灰岩などで造られたものが多く、比較的酸性雨の影響を受けやすいと言われている石灰岩系の使用例が少ない。しかし韓国では大理石の石造文化財が多く見られ、ソウル市内にある圓學寺十層石塔（国宝第二号）、敬天寺十層石塔（国宝第八十六号）などにその被害が認められる。それらの石塔に見られる黒色汚れを日本でX線回折分析した結果、硫酸カルシウム（石膏）が確認された。これは酸性雨などで溶かされた炭酸カルシウムが硫酸化物と反応して生成され、その過程で煤煙などの浮遊汚染物質を取り込みながら石材表面で結晶化し、黒い石膏の皮殻になったことが証明され、ケルン大聖堂（ドイツ）と同じような劣化過程を経ていることが判明した。現在、圓學寺石塔は覆屋（写真1）の中に保存されている。また敬天寺石塔は修復中で、完成後ソウル市龍山に新築中の国立中

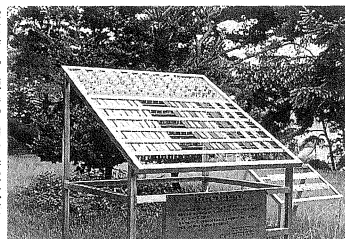
央博物館内に保存される予定である。黒色汚れに対しては、重要文化財ニコライ堂（東京）の修復時に実験が行われ成果をあげたレーザクリーニングを試みる予定になっている。金属文化財では、清州市内にある龍頭寺址鉄幡竿の修復には、国宝東大寺八角燈籠の修復に使用したのと同じカルナバックスを主成分としたコーティング剤が用いられた。対象が鉄と銅との違いはあるが、今後の経年変化の比較材料になると考えられる。

気象観測や環境汚染物質の測定は、鎌倉大仏や東大寺で観測しているのと同様の項目で行うことにした。ただし日本では酸性雨中のイオン濃度や大気汚染ガスの測定を全自動システムで行っているが、韓国において同様の方法をとることは困難であるため、雨ごとにサンプリングしてイオンクロマトグラフィーを用いて分析を行っている。観測場所は、ソウル市景福宮にある国立文化財研究所屋上と交通量の激しいソウル市庁舎前に位置する徳寿宮内（写真2）に置かれている。そこには、屋外暴露試験台も設置され、金属や石材試料が暴露されている。金属暴露試料は、鉄、銅を主体としたものであり、銅は日本で特別に製造された銅・錫・鉛合金が標準試料になっている。石は、大理石、花崗岩、砂岩などが暴露されており、韓国側が標準試料を提供している。

## おわりに

大韓民国国立文化財研究所と東京国立文化財研究所の間の国際共同研究は、本年度から「文化財環境と文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究」として第一期共同研究の成果の上に、第二期共同研究の新しい展開を求めて双方で研究フィールド（日本側は重要文化財白杵磨崖仏をフィールドとする予定）を提供しあうことになっている。韓国側の提案を現在検討中であり、韓国側研究者の来日を待つて協議し最終決定を行う予定である。

近年、世界文化遺産が登録されるときに評価された価値を守るためのモニタリングの重要性が認識されはじめている。環境破壊は、文化財やそれを育んできた歴史的景観の保存状況を危うくする危険が大きい。この研究は、文化遺産モニタリングの意味からも重要な国際共同研究ということができる。将来的に条件が整えられれば中国を含めた研究の輪を広げていきたいと考えている。



〈写真2〉 徳寿宮内の暴露試験

## ●長崎市南山手伝統的建造物群保存地区（長崎県）

港町／平成3年4月30日選定

長崎は安政五年（一八五八）の五箇国修好通商条約により設けられた開港場で、海岸沿いから山手にかけて一〇万一、三五〇坪の外国人居留地がつくられた。居留地は海岸側から上等地、その背後の中等地、山手の下等地に分類されて外国人に貸し渡され、明治三年の制度廃止まで続いた。

保存地区は、下等地である南山手町の南北七〇〇m、東西一〇〇mの範囲と海岸寄りの中等地と上等地の一部を含む約一七haの範囲。南山手は主として住宅地として使用されていた区域で、石畳の坂道とともに多くの洋風建築が残る。北寄りに大浦天主堂・日羅典神学校、その南には幕末から明治にかけて活躍した貿易商の住宅である旧グラバー邸・旧リンガー邸・旧オルト邸、海岸寄りには旧香港上海銀行・旧長崎税関下り松派出所があり、いずれも重要文化財（大浦天主堂は国宝）に指定されている。

幕末から明治時代の洋風建築を主体とする伝統的建造物が良く残り、我が国近代化のさきがけとなった開港場の居留地の姿を良く伝えている。現在、旧グラバー邸のある一体は市のグラバー園として公開されて長崎のシンボルとなっており、旧香港上海銀行・旧長崎税関下り松派出所やいくつかの洋風住宅も公有化の上、一般公開されている。

（文化財保護部建造物群文化財調査官 島田敏男）

## 編集後記

二一世紀を目前に迎え、国際化のますますの進展に伴い、文化を通じて国際交流も一層盛んになってきています。今回は、国際文化交流の中でも近年特に重視されてきている、中国および韓国との文化交流にスポットを当てて特集を組みました。

これまで国際文化交流といえは

欧米諸国が中心であり、中国および韓国の両国とは地理的、歴史的、文化的に関係が深いにもかかわらず、十分な文化交流が行われてきたとは言いがたい状況でした。

しかし、ここ数年、両国との文化交流の気運はかつてないほど高まってきています。以前はあまり見られなかった中国、韓国の現代美術、映画なども目にする機会が増え、個人的にも大変喜ばしく感じています。

皆様も今回の特集を読まれたことをきっかけとして、中国および韓国との文化交流に関心を持っていただければ幸いです。（？）

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、ご質問、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄や文化庁のウェブマスター宛へお寄せください。

〈ホームページアドレス〉  
http://www.bunka.go.jp/  
〈ウェブマスターメールアドレス〉  
webmaster@bunka.go.jp

（通巻382号）

## 文化庁月報 7月号

平成12年7月25日印刷・発行

## 編集—文化庁

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-2

## 発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(3571)2126

販売 03(5349)6666

URL: http://www.gyousei.co.jp

## 印刷所—㈱行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

㈱ぎょうせい営業部広告課

電話03(5349)6657（ダイヤルイン）

©2000 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。